

生前に遺品整理を申し込む人が増えている

吉田太一 よした たいち

二〇〇三年に日本初の遺品整理専門サービスセンターを立ち上げた「キーパーズ」代表取締役



「自分で使った物は自分で片づけろ」。昔から家や学校で叱れながら教わってきたことである。誰もが目ざり前の事だ。遺品整理、片づけは、生前生活の中で無意識のうちに見て片づけを行っていた。しかし

自分の「遺品整理」に聞かされては、どうして自分の手を借りなければ行かないことが出来ない。全ても人が避けて通れない最後の作業なのだ。ある遺族との出会いをきっかけとし、二〇〇三年に日本初の専門サ

ービスとして始めた遺品整理の依頼は、現在年間千五百件ほどにも増加している。

遺品整理へのニーズがこれほどまでに高まってきた理由としては、少子高齢化や核家族に伴う一人住まいの増加による社会からの孤立化が大きいと考えられる。依頼者別にみると以前は男や嫁が多く、未婚や子供を持たない故人の遺品整理が多かったように思うが、最近では息子や娘からの依頼が徐々に増加しているように感じる。必ずしも親子の縁がなくなつたか、情が消えてしまったわけではないのだが、兄弟がないため手伝ってくれる人がおらず仕事も忙しくて休

めないなどと、自分で行いたくても物理的に困難な状況であるために依頼してくる人が多くなってきたからであろう。遺品整理に限らず、無縁社会、ではなく、無縁社会のお助けサービスとしての意味で求められているのかもしれない。また奉行的に依頼者には立会いを行ってもらうが、なかには立会いを拒否してお金だけ振り込むという息子を親族も多く、特に形見親が増加してきている。相続放棄をする遺族である。借金問題など様々な事があるのだから、金問題が親族や相続人との身内以外であるケースも増加しているのが実情だ。

ついでに故人が、数年前にリストラされた無職となり、週に三日程度のアルバイトで生計を立てていた。離婚した元奥様と子供は五百メートルほど離れた所に住んでいたのだが、故人がこんなにも近くに住んでいたとは知らなかったという。隣の部屋の住人に話を聞いても、十年以上住んでいるがお互いに言葉交わしたり挨拶をした事が入りもなかった。突然とした室内に入ってみると、他の孤立死現場と同じように、置いた故人の型がくっきりと遺されていた。まるで自分が、ここに住んでいたという事実を訴えるように。部屋の中の無人局に一人で会話を無く済み、誰にも気づかれていない人々がこれほど多いのかと驚かされる。

言う。この女性のケースに限らず、親族に迷惑をかけたくないとか、子供はいるが頼みたくないというように考えている依頼者も多い。男女比から見ると女性からの問い合わせが七割ほど、男性の相談者を大きく上回っている。これは平均寿命が長く一人暮らしの可能性が高く、死について現実に考えている女性が多いことや、男性には自らの死に対して臆病な一面があるからではないか。

さらに考えなければならないのは、社会問題となっている孤立死現場の増加である。ある依頼では、死後一カ月で発見された故人の年齢は五十六歳であった。意外に若い年齢にショックを受けた記憶がある。高齢者（六十五歳以上）にならなければ、自らも声を上げていく社会からも見送られやすいのである。このケースでは、十五年前に離婚し一人で生活を遂

最近、葬儀だけでなく生前に遺品整理を申し込んでおきたいという予約が増加している。生涯未婚の八十歳の女性は、両親を一人で見送ったあと全ての身内を失った。身内のいない彼女は出来る限り自分の最期の準備をしていたが、遺品の整理に関してはどうしても勝てない問題として長年の悩みのタネであったと

いつか必ず訪れる死は、人間が最後にたどりつて最終章の仕上げのようなものだ。どんな死のカたちも、否定すべきことでも痛ましいと思われなくても、できることなら死後に人様にかける手間や迷惑は最小限にしておきたいと思うのが人情ではないだろうか。そうした心算を持ち、死後のことを想定しておくことが必要となる。もし自らの死の日が分かっていたら、人は亡くなる前に葬儀道具や財産の整理など様々な準備をしておくことができる。しかし、人間というのは誰かの手を借りなければ、自分の生き様をきれいにこの世から消し去ることは絶対に出来ないということに気づかな

ければならない。そして、亡くなったらすく誰かに気づいてもらわぬ。遺品の片づけをお願いしよう」と思うのであれば、普段からの付き合いは絶対に欠かせないのである。つまり、自分の生きた証である遺品を片づけてもらうためには、もうひとつの生きた証である人間関係が不可欠なのである。たとえ遺品整理業者に頼むことになっても、その人間関係をともに誰かた

依頼してもらわなければ遺品も放置され、死後いつまでも生き様を遺し続けてしまうことになってしまう。遺品とは故人にとって、長年連れ添った親友のようなものであり、生前の故人の生き様や性格を知っている。いわばベットのよう同居人である。遺品の残された部屋に入れば、故人の存在を感じるのとはそのためであり、遺品の整理が完了しないと人生の幕を完全には下ろせないのだ。